

播磨の聖人「龜山 雲平先生」を発掘する……シリーズ 10回

第9回目

テーマ：姫路城開城 と景福寺（現地講座）

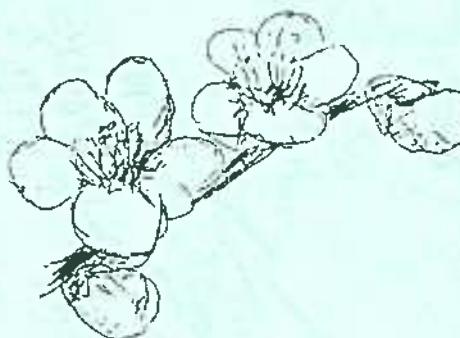
龜山雲平顕彰会代表

講師：長野 哲 先生

日時：3月15日（金）午後1:30～4:00

場所：白浜公民館 1F 会議室（集合）

と景福寺



□ 交通の関係上、出席予定者は、前日までに
お申し出下さい。

今回は・・・

幕末、幕府軍に参戦した姫路軍に対し追討の勅命がでた。

近隣の備前・山陽1,500余兵は姫路船場まで進軍してきた。

姫路城無血開城に至る諸事情は言語に絶する。

この時、敵の本宮は景福寺。

備前軍との交渉係は龜山雲平先生と斎藤鉄介。命を賄しての活躍を知る人は少ない。

明治元年1月16日、姫路城は開城した。

城明け渡しに際しての豪士の毅然とした態度は敬服の一言につきるが、その豪士を教育育んだ教育者龜山雲平先生に思いを馳せる人はさらに少ない。

景福寺を訪ねて、往時をふりかえってみたい。

[54]

白浜公民館だより [特集号]

ホリデーホテル
E557-350-7
346-4499

播磨の聖人「亀山 雲平先生」を発掘する…シリーズ10回



第9回目

テーマ：姫路城開城 と景福寺（現地講座）

亀山雲平顕彰会代表

講師：長野哲先生

日時：3月15日（金）PM 1:30～4:00

場所：白浜公民館1F会議室（集合）

と景福寺

今回は

幕末、幕府軍に参戦した姫路藩に対し追討の勅命がでた。

近隣の備前岡山藩1,500余兵は姫路船場まで進軍してきた。

姫路城無血開城に至る諸事情は言語に絶する。

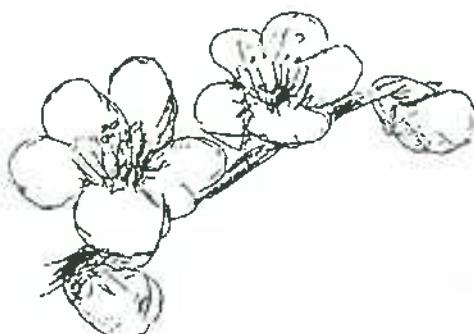
この時、敵の本喰は景福寺。

備前軍との交渉係は亀山雲平先生と斎藤道介。命を賭しての活躍を知る人は少ない。

明治元年1月16日、姫路城は開城した。

城明け渡しに際しての藩士の毅然とした態度は敬服の一語につきるが、その藩士を教育育んだ教育者亀山雲平先生に思いを馳せる人はさうに少ない。

景福寺を訪ねて、往時をぶりかえってみたい。



□ 交通の関係上、出席予定者は、前日までに
お申し出下さい。

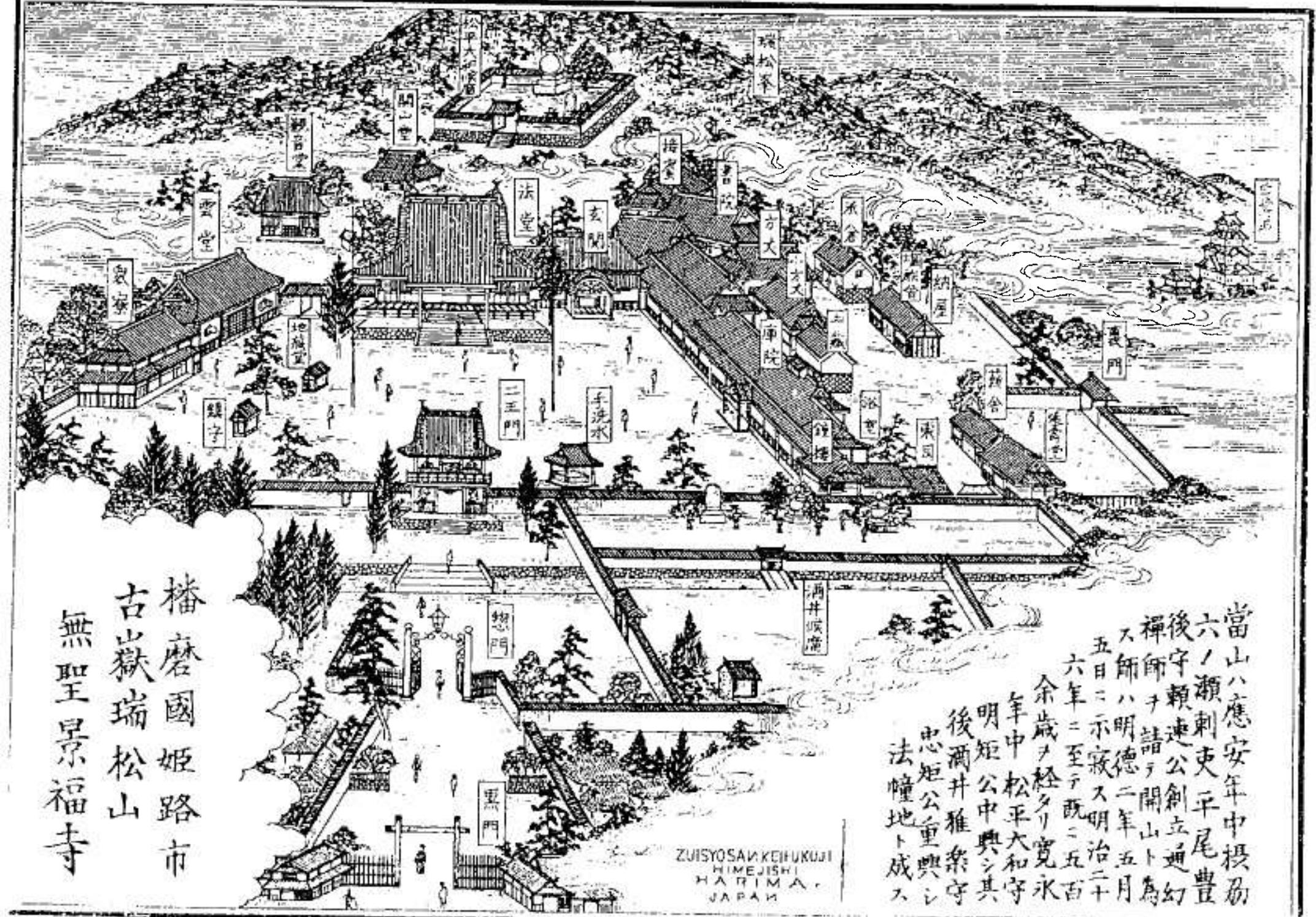
[54]

白浜公民館だより【特集号】

白浜公民館
白浜町350-7
046-4499



95-9



播磨國姫路市
古山獄瑞松山
無聖王景福寺

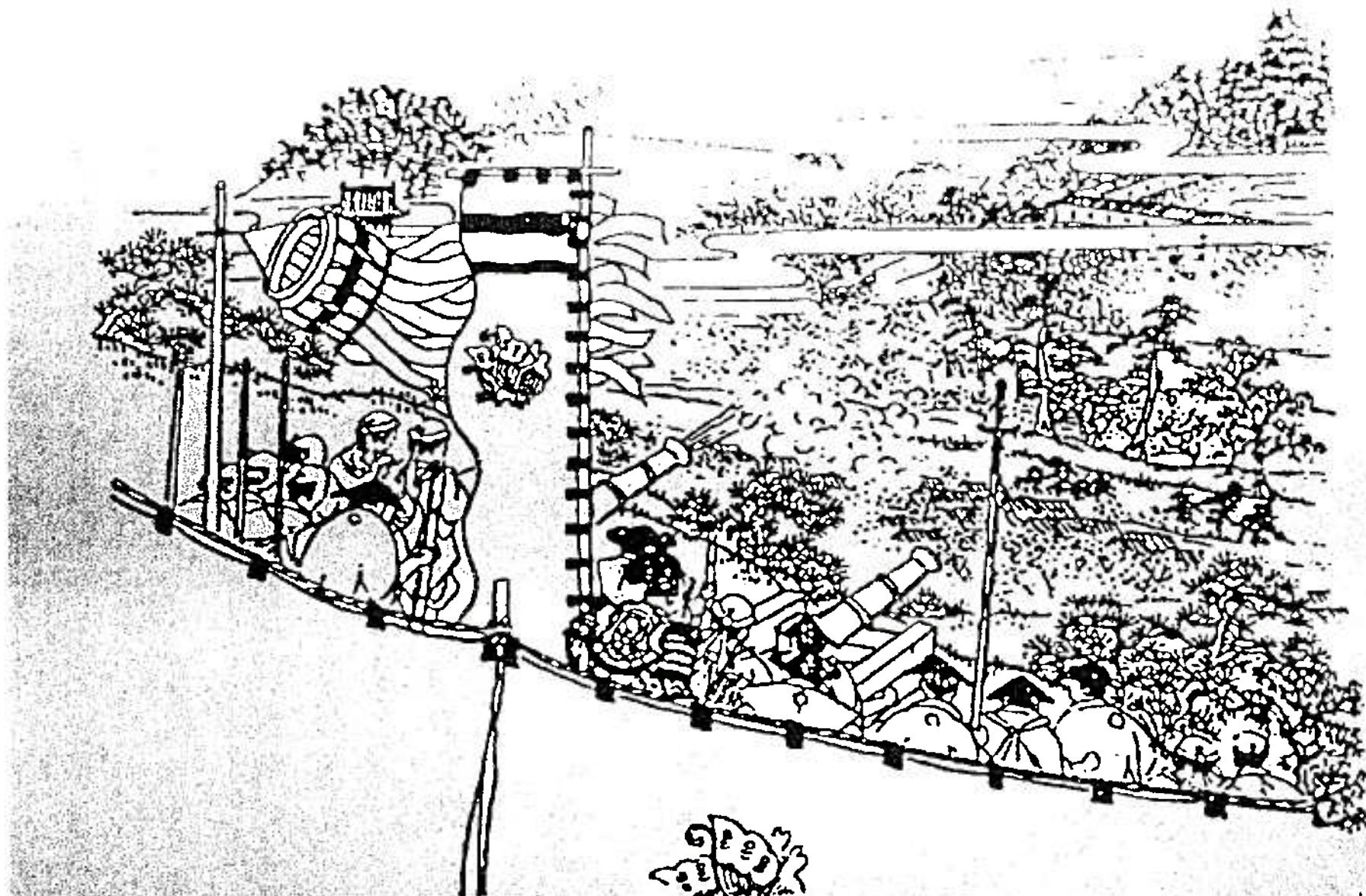
ZUISYOSANKEIFUKUJI
HIMEJI
JAPAN

當山八應安年中根弱
六ノ瀬刺吏平尾豊
後守賴連公創立通幻
禪師子諸テ開山ト為
五日ニ示寂ス明治二十
六年ニ至テ既ニ五百
余歳ヲ経タリ寛永年中
松平大和守明矩公中興シ其
後濱井雅衆守忠矩公重興シ
法幢地ト成ス

そ頼そ対しえ之本州佐に子主續にれ説に忠が藩城命明そ糧前蒂て戦斎ての一幕
しつのし淨た助多武平慶しに酒、闇も得対續、士、一けし即他軍刀、交藤こ砲兵日府慶
てて間喚土。一意佐に応た迎井忠わ聞役し、藩に城先月かてち一本、直渉鑿の擊が追軍応
、新國願宗そ行氣ま守四。え忠惇るきに不現主帰接供ニか雲全切營松ちを介とを攻討に四
神政元書大この陽でら年忠強丙の入亀敬藩が城收隣十つ平面を景平になでき加めの參年
田府姫に施で入へ辿れ三續の名でれ山の主不をの摩三たが降差福孫城しあのえよ勅加一
兵へ路て山大京家り一月に弟にて雲謝忠在許巡、日頃城伏出寺三を、つ官てり命し月
右ので謝西津は老着路三代直隠か貢平罪惇なさ視明御でへでしへ郎開官た軍來、がた三
衛工はし福本差一い京日記わ之居ねえがをののれも石勅あ帰あ即引、け軍。とた景発姫日
門作家す寺陣止のた都直朝へてよこ名て人、わ後四たて、開し合す対裏交寺ら藩都
尽當、旨謹宿さ来こ中助廷後貢りのさもに重より供絛。來城、又事し平渉山れは鳥
力、重を慎泊れ荒ろ仙一に忠い考まれら歸役つ同貴隆たをま七と無ら係か、朝羽
にて役秦しすて川、道行謝邦支えまたう城協て二州譲の決た郎し条はりら官敵伏
よいら請なるい牧京をはせ十のいはし決ての段七姫下はし、を、件福が姫軍と見
りたがしが予る歲都急雲、手てら定こが留い平し五伊た藩かし貢未落日路三々・器質老伏機山城前り戦
新づい朝をと來守だ、め歳勢、のし、い前しを城百と弾と大を上雲め岡、い
政るた廷変を、居、松るを崎忠存いそ朝藩た以へ余夜、薦し河しで平が山同に
府を、に更伝直役江崎事養藩亡すの廷主て入が食備内停とけ藩十、

全件分雲又でとく 南問い亀五
部あか平景漢しのこ摩所る山千
でりつの福文て書の綱の。雲三百
まで書寺の大簡人紀同雲平百
位すいいの本変がとの窓平の余
は。るた墓な有亀は撰生の墓の
あ未雲墓はど名山、文で墓が墓
るだ平石ほもな家雲で後碑あが
と発撰がと出大に平あの銘りあ
思見文たん版学残死る東は、る
いさのくどし者づぬ。京、九景
まれ碑さ姫てててま 帝か墓福
すな銘ん路おあいで 国つが寺
いはあ藩りりるの 大て一山
も各り士ま、文 学江列墓
の地まのす雲日通 文戸に地
もです墓。平本が 学昌建の
あ六。で と漢あ 博平立山
り十現亀 共字り 士坂し頂
、五在山 同者多 学てに

い大 大景 本を る若入街い守助 の朝高寺下通督兵
・吉役福朝 領命明 きつ道た居にこ軍命須に方祐東庫
にを寺敵 安せ治 新たを・役姫れ資を隼入平は久裁
亀 対果はと 堵ら元 藩。経三三路に金尊人つ等、世判
山 した、さ され年 主こて月浦帰依と奉他たを伊通所
雲 てし姫れ され姫五 をの同ニ文藩りしす姫、従藤祐判
平 深た路て た路月 麋と三十左の、てる路 え博に事
の 甚・盛い 藩二 喜き十六衛許大十事藩、文姫岩
墓 なこのた 十十 し姫日日門可津五を重 三、路下
に るの浮姫 五日 て路守急よが足万督役 月寺藩方
つ 敬裏沈路 万つ 出城後ぎり下止両い達 二島の平
い 意方の藩 石い 迎下四西亀りめの、は 十宗情を
て をのかを はに えの時福山、に献新通 一則況頼
払歴か教 酒忠 た人頃寺雲こな金政祐 日、視り
わ史つづ 井邦 と々姫を平のつに府の 姫中察兵
ね的たた 家に いは路出へ事て處の指 路路を庫
ば意大本 に家 は十東立飛をいじ東岡 船延勅裁
な義舞轉 タ賜督 れ五屋し脚京たた北に 場年め判
らの台寺 り相 て歲敷山が都直・出從 本、た所
な重のと 、統 いのへ崎着留之 兵い 德岩・総



姫路の景福寺山、男山から城を砲撃する岡山藩兵。
赤穂の夜にば如母の江川

正月十六日有懷去年此夜兵馬之事

明治二年

癸卯正月十六日官兵

一痕淡月掛窓梅。疎影清香好舉杯。不似去年兵馬夕。砲
烟驟地入城來。

又

兵馬迫吾郭。市街聞砲聲。未知主君罪。已負賊臣名。揮淚
致關鑰。脫刀奉誓盟。月寒郊外寺。夜宿坐三更。

又

以下承奉命入京遂赴三東郡奉公子忠外君西面還之事上

纔出重圍赴帝京。播山丹水雪猶橫。九門春色無由拜。又
理輕裝向武城。

五十三亭兵馬間。竹輿咿軋度函山。誰言幕議背朝旨。坐
待王師不鎖關。

湖頭春寺駐公輿。聽雨看花十日餘。未識何時入京洛。挑
燈重綴雪冤書。

公子遠大津十日上書子國下二月返京

市街聞砲声

町には砲店が聞えている。

未知主君罪

主君の罪は未だわからないのに

已負賊臣名

もはや我々は賊臣の汚名をこう
むる。

連床致凶鑰

涙をふるつて、閻の鍵を掛け。

脱刀奉誓盟

刀を投げ捨て、降参の誓いをた
てる。

月郊外寺

折から郊外の寺は寒く(見當付)

夜宿座二更

夜半に座ったまま、これから
先のことを考える。

兵馬直呂抄

その梅がまばらに見え、清香を
放っている。酒杯を傾けるのに
一度よい夜だ。

不以去年兵馬夕

思い起せば去年は戦乱にくれ、
砲煙がまっしぐらに城に飛んで

来た、その去年の夜に似ない今
晩の静かな風景だ。

敵の兵馬が我が城郭に迫まり、

明治維新と姫路城開城の記録（下）

四、姫路暴行をかけた事件

（一）暴行（第二回）

（二月）はいざと新政府は、ほほ西日本の平定を終えて倒幕のための体制固めに入った。三月には親征の船を発し、ついで三種の局の総裁改選を行つと、に政機能の強化を図った。姫路藩主酒井忠厚は、五日老中職を解け、また酒井忠義も六日丹戸城を出て上野京を入り其に親信の態度を表明した。

（九日）新政府は、達成有志川玄蕃と親王を親征軍大總督に、西郷隆盛・林九郎を參謀に任じ、関東平定のための本陣を建立した。そして、十二日に征討の布告を出し、十五日江戸を出發して東北軍は出發した。（この間、馬鹿・伏見の轍い以後、朝敵となつた諸侯に対して次のように処分案が示されている。）

（一）田代意見以下正義

第一等 脱走

第二等 会津・桑名

第三等 幸田松山・姫路・鍋内松山

其主人海城人登出（吉田）免免（不心）以百軍へ發遣し、大刀會ヲ謀叛逃出免免之間へ無之トセ、即ち大刀會、尼賀行セシハ、既不審ヲ不論同第ニ可有之、或ハ近事凶毛、其外要諭ニ在勤、別テ裏兵ニ至也ヲ補院セシ節

第四等 定住

其主人海城中、出史之謀叛不心當引以百軍へ發遣シ、大刀會ヲ謀叛逃出免免之間へ無之トセ、即ち大刀會、尼賀行セシハ、既不審ヲ不論同第ニ可有之、或ハ近事凶毛、其外要諭ニ在勤、別テ裏兵ニ至也ヲ補院セシ節

第五等 人頭・高松

其主人在田中、森坂元和家時、不心得リ以百軍へ發遣シ、遂ニ其家未ヲ取れ此源田中付置、身浦上空、先崎頭太守、御軍中出候部若木等ヲ以御取扱焉在、當以上、其事不怪、即ち過誤、開城ニモた主婦ハ、或様其城南地共御通り、即ち開城平定之上、何分御免分候、御出度、四等、五等、人頭小見、人頭別々有々御候、行、其見人主空、九郎頭出候得ハ被免、要御用通之主、即ち何分御有免之御地御留候、御出候テ、如何哉

（一）五等之外、豪良根等ニテ御反應有之諸々ハ、御督貢總行詰ニ付、充

右之 悪名ヲ以、其家慶先姓等被為仕、主人之威ハ必上京候、仰付度事發令された日付は確かではないが、田代意見征討令が出て以来ほほこの罪案通りの朝敵処分が実行されたようである。（二）

（一）第一等は、越後守・第二等は、松平春風（会津藩）と松平定敬（桑名藩）であった。第三等は、松平定綱（宇都宮守護）・酒井忠博（姫路藩）・板倉勝静（備中守山藩）である。姫路藩には、第三等が下された。そして第三等までの「その界線からす」追討、開城の上、城と領地を没収し、すれ開城平定後に追分を決するとしている。（の追分をからると姫路藩は、城と領地の没収に相当する事がすされる事状であった。また四等・五等の処分については、藩主の上意御用と元跡廻りを以て竟典に廻する象徴としている。ちなみに備中松山藩は正月十四日、西郷藩は同二十一日、千葉松山藩は同二十七日に開城・降伏し、高木・大原の両藩は、県制の意向を示した御願い出をしてその事を許されている。いずれの場合も薩摩藩諸侯には、「藩主の上意御用」、「元跡の新しい出」、「本領および年貢金の提供が、精勤の実効を期す方法として示され

る」。而して藩主・領地とも掛けられた姫路藩は、以後この条件を満たし、更に磨きを磨くため多くの撃滅書を新政府に提出する。姫路城開城後の新政府の動向を知るに付ける撃滅書に添つて分析する以外に今のところ具体的な文

節字龜山先生墓碑銘

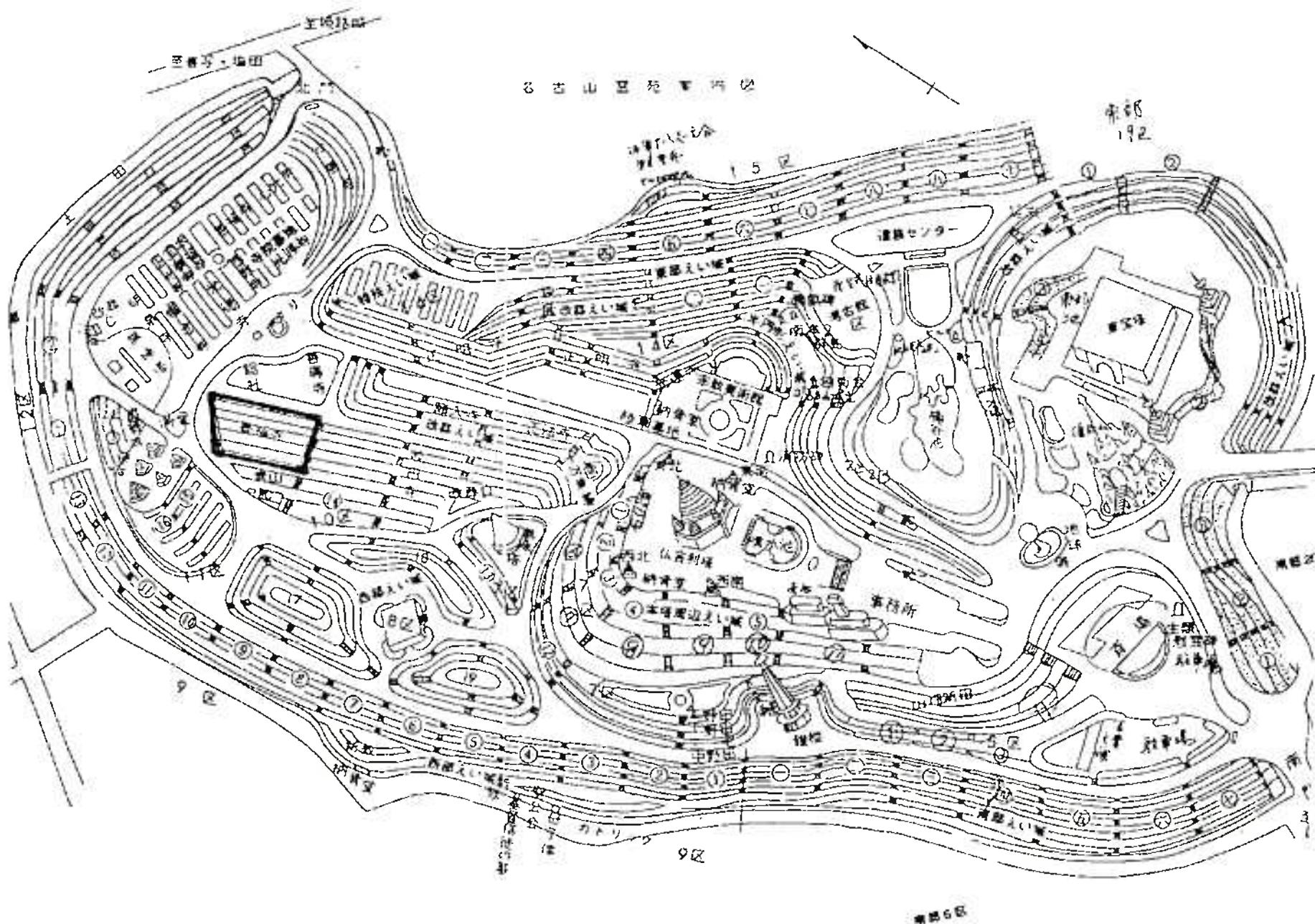
國家日赴開明人情月流輕偷而謹惡君子若吾節字翁世未多見其比也。翁諱美和字由之，稱敬佐又源五右衛門後改雲平。節字其號。龜山氏。姫路藩世臣。父諱百之。實福田繁彝第二子。來嗣龜山成將後。娶其女。翁其第二子。十歲喪父。與兄惲毅事母孝養極至。十八歲擢藩學授讀。剛毅歿。翁承後。嘉永四年以落命。學江戶昌平學。爲詩文係。尋藩主絢光公逝。翁在喪。日穿禮服。危坐終喪。居三年。歸爲顯德公侍讀。公勵精圖治。政績較著。翁啓沃之功居多焉。及閑亭公襲封。擢大監察兼敎授。翁清廉率先。一藩風俗漸改。增俸至百七十石。當時國家多難。公陞大老驥。翁在藩輔政使無內顧之憂。其功多矣。既而公致仕。崇堂公承後。明治元年正月伏見之役起。王師逼國疆。翁與諸士歸順。遂得主家存祀者。亦與有力焉。裕齋公立。翁爲侍讀遷中小姓組頭。無幾病辭職。後爲松原八幡社祠官。榜下輒教授。名家塾曰櫻海講堂。遠近來學者甚衆。二十二年補少教正。尋兼神職取緒等諸職。翁爲人。眉目俊秀。外恭謙而內嚴正。歷任諸職。踐躬盡瘁。公爾忘私。對家人如賓客。遇門人如朋友。奉身節儉。賑恤貧窮。居松原凡二十年。景慕其德。來訪者日夕接踵。翁每吐哺迎之人。人稱爲播磨聖人云。三十二年五月六日病歿。距文政五年閏正月二十日生七十八年。鄉人哀悼如喪考妣。用鄉葬之禮。芝姫路景福山先塋之次。有詩文稿若干卷。其他雜著甚多。皆藏家。翁始娶荒木氏。生二男一女。皆先歿。繼室西松氏。無子。亦先歿。長男亨有遺女。乃養內山仲次男茂理配之。以嗣家。翁之歿也。舊藩主酒井伯悼之。賜贈金若干圓。蓋異數也。銘曰。

勉學養德。奉職忘身。接人謙謹。脩己恪勤。厥行矯正。厥言和溫。弟子是式。風俗歸尊。君子人平。君子人也。

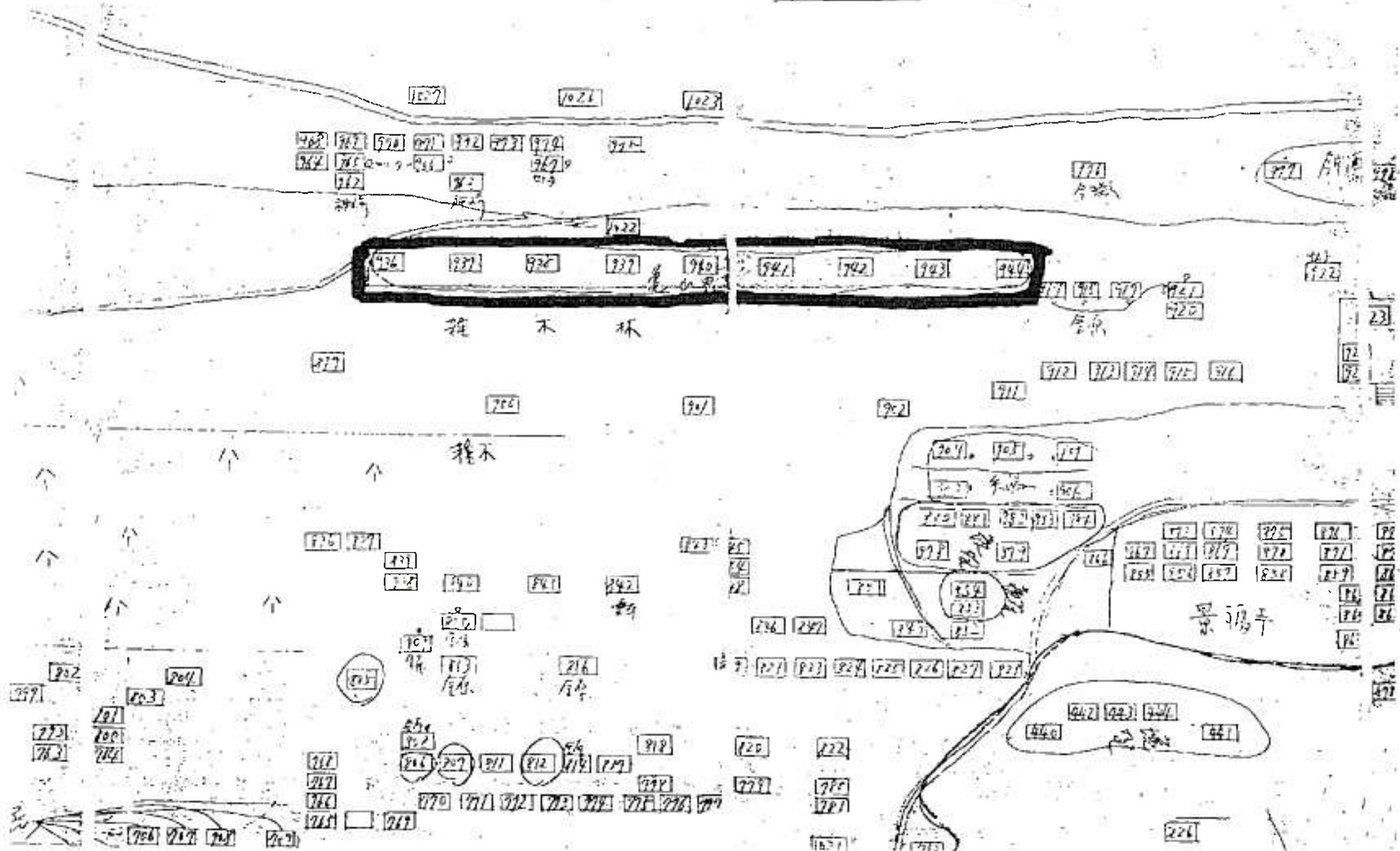
明治三十六年五月

正五位勳五等南摩綱紀撰并書時年八十有一

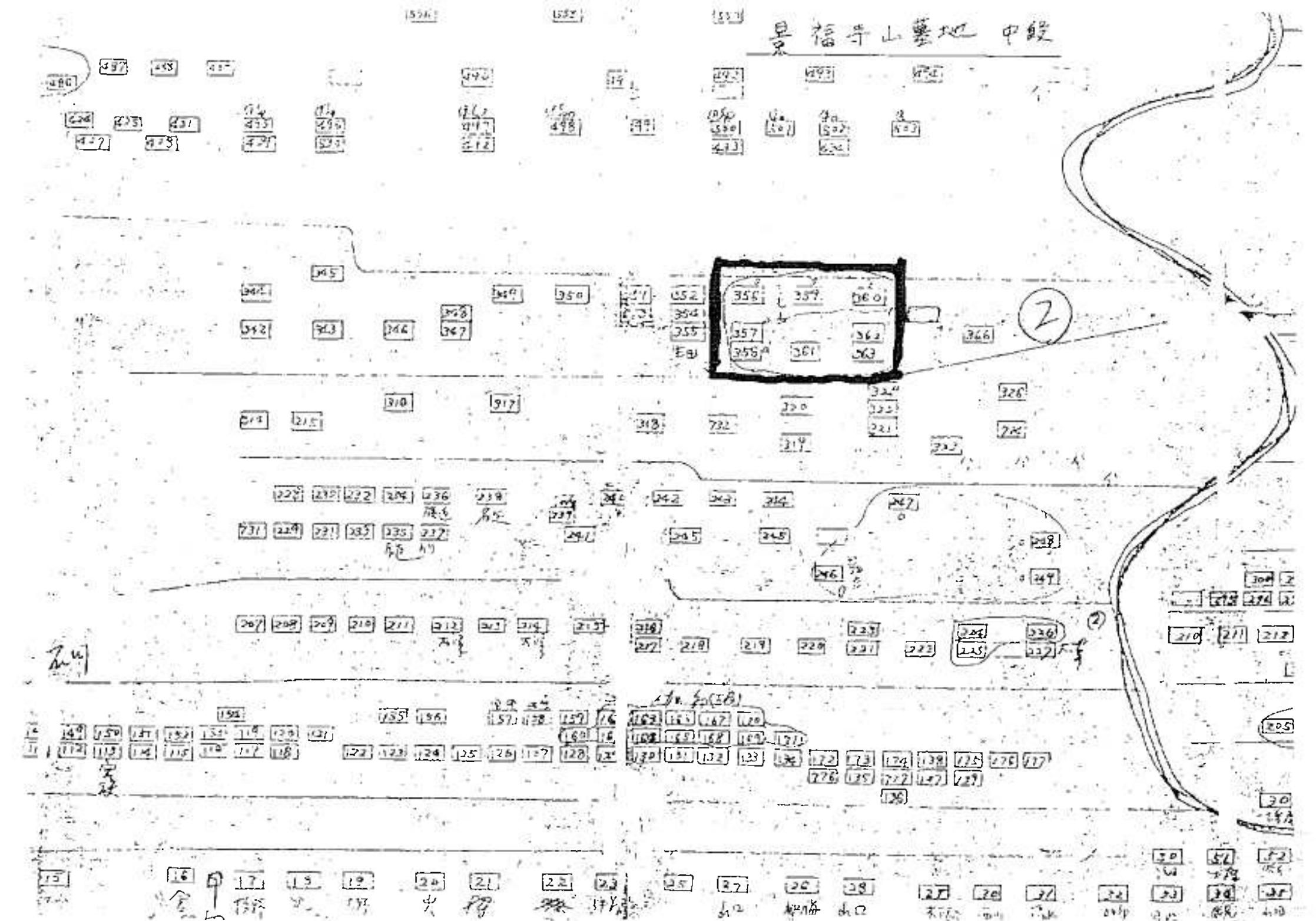
義孫 龜山茂理建之



景福寺山墓地 工段



景福牛山墓地 中段



龍野町 むかしの西國街道（山陽道）筋に栄えた町。この街頭が郷野に通じるところから龍野町の名がつけられた。町の起りとして、天正8年（1580）、黄城を攻略した秀吉が、黄城の町人百姓をこの地に移らせたという説が強い。この年の10月には、自由に商元ができる衆市（衆の市）を出している。今は、古い商業の姿もなくなってしまったが、龍野町5・6丁目や農人町の道路は堀の街のようにジグザグで、堀下町の面影を残している。

長福寺山 長福山北麓の小国山の一つである「船丘」がこの山であると推定されている。その後、西園寺山・泰和寺山・嵐山・群鶴山などと呼ばれてきた。山下の寺が長福寺となってから今のように呼ぶようになった。山上には、嵯峨源氏主松平朝矩（1743年）の墓碑がある。

長福寺 龍野山と分し、香川家の寺院である。寛文年中（1661～1673）被生松平直矩によって再興され、のちに、香井氏代の菩提寺となつた。境内に酒井忠志・忠宣・忠信の夫人の廟がある。明治11年、財制廢格中学校の前身である六郡（舞東・音羽・神西・神西・印南）組合立長福中学校が長福寺で誕生した。しばらくの間、船場町の住民にもなつた。

見星寺 長福寺の菩提寺。船場川は、源たびが大木を出していている。とくに、寛延2年（1769）の洪水は船場地区に大きな被害をもたらした。この船場寺は、安永2年（1773）に23回忌の法要で造られたもの。

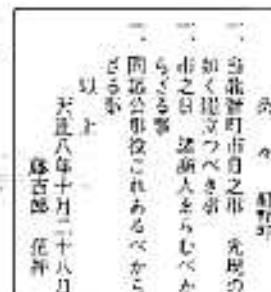
船場死人

紫前町	4人	御前町	4人
新谷町	11人	森人町	13人
小河木町	18人	龍野町2丁目	23人
龍野町1丁目	12人	龍野町3丁目	2人
龍野町5丁目	1人	末田町	13人
上井町	11人	下井町	11人
吉田町	28人	横尾町	93人
	322人		

船下町ができるまでの船場

龍野町などが誕生するまでは、中村と呼ばれていた。中村は、姫山の南から西は今の西新町あたりまで、北は西光寺（今の舞山伏あたり）までという大きな村であった。

南には福中村があった。林木町南か吉田町あたりを西野といい、その北を西城戸・岡と呼んでいた。西新町にはねよよそ二百メートル四方の境内をもつ福中寺があった。天正元年（1573）の船時祭（三ノ山）に中村や福中村が福報した記録がある。



義吉の刺札

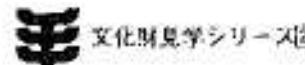


船場蒲生松平明矩の墓



天正（1573～1592）の古地図

（出典：船場市立高丘中学校教諭）



文化財観察シリーズ四

姫路市教育委員会文化財課（昭和63年2月29日発行）
(平成9年1月 写版)

『船場』をたずねて



姫路 船場 八景 天正10年（1582）

船場は、船場川以西を中心北は男山あたりから北は龍野町（山陽名）・千代田町。西は若崎山あたりまでをさしていた。この拡張は、天正5年（1577）～1582年に龍野町が成立しており、ほぼ同じに小姓町もでき、姫路城下町発展の先駆けとなった。元和7年（1621）ごろ船場川が改修され、御津港との間に水運が盛んになると、越本町・千代木町・清水町・大坂宿町などが繁盛していった。酒生藤原氏の時代（1649～1667）の住家には、さかうに「船場」の名が用いられるようになっていく。その後、天正15年の耕地整理、明和開拓の国道改良工事により、現在の船場2号橋近辺には多くの社町が誕生し、北面では、岩屋町以北もだいに人をなぞり、かくて「船場」「堀端」と區域を別にするようになった。

船場川 もと、市川の本流の跡と概念されている。越前川・三和川などと呼ばれていたが、越後藤主多忠政が元和年中（1615～1621）に改修して城下から船場港へ通じる水運の役を担つてから船場川とよばれるようになった。船場川を上流する高瀬川は下流の方で改修された。右側を植木町は、米・木・茶・穀・尾・尾・鷹・鷹などとあつた。この舟便は明治時代ころまでつづいた。船場川改修記念碑・小林木町の記念碑・経水橋の近くにある。長い間川底に埋もれていたので文字はよくなく読み辛いが、「未だの御跡として清水御門之外、河内、御立石町せ付けなされ……」と記されており、改修記念碑と断定してもよい。

市之堀 材木町や小林木町のあたりの船場堤に市が開かれて栄えたが、この市から堀の名がつけられた。

舟入川 材木町と吉田町の境、奥座敷の町にある。船場川を上流する川をつないだり、荷物を積み下ろしたところ。今、小さな公園になっている。



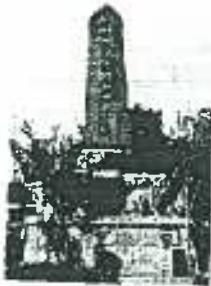
舟入川（昭和45年ごろ）



船橋き石 江戸時代初期に横浜港の防波堤工事によって造られた。今、その武跡の外側面にて、船場山崖において複数を勢いたてた船橋が定石として残されている。

鬼の甲場 博多町の鬼の甲場において、それまで海上で走っていた船場橋を移築し、下にさして二重橋にするために、横手で船の運びの道を走り、南北に流れを変えた。増水した分は直角にならねども、これで、セモウ船の設計にならづいたといつ。

勤王志士終焉之地記念碑 横町の大森南兒童公園にある。この地は元に勤務者の平舎と供養場があった。亞麻着にも草木に勤王清貧がありたり。洋の取り縫合せが織しく。織られた者のうえ、何名は南北の人名が刻められ、または白いした地である。



勤王志士終焉之地記念碑



常夜燈

千代田町の常夜燈 千代田町江戸時代には、櫻井町沿いの馬頭ノ門へと到達できていた。矢張り馬頭門にあったのちに作られた。

千代田町の道標 「有吉八幡、千代田、北ノ河原の道標」。本町の西端の道標である。

レンガ造りの工場 千代田町に多くの開拓地があり、「御上御馬廻」もあり。そのこちらの工場を見られる。駅前ではレンガ館。建物はこうと見られる今日。貴重である。左は、山崎色（緑）第二工場となっている。

千代田通跡 勤業機械路面製作所内に現在する「太正二年」。この地に日出新興会社を建設の時、竹生六右衛、林政、吉野などから植えられた。

耕地整理記念碑 佐倉町王子町にて、この地第一番は「松川町」。矢崎河川、鶴岡本郷等から西はほとんどが田畠であった。一方で、大正12年(1923年)、この地を耕種整理する計画が立てられ、同13年起工、同15年竣工し、同年の11月21日より、開拓。之先の町が生まれたことを記念したもの。

鬼郡山 勤業機械記念工場の近隣にある「鬼山」。此の山であると推定されている。朝倉山をよむように。大正11年(1922年)鬼ヶ谷を築いて、この間に石垣や石垣閣を見て、この山に名附された。

西の平通り 昭和11年(1936年)、山の山坂上に設置されている。
船場本郷 横浜市にあり、神奈川県にある別称。昭和清正と子守忠義が、横浜の日暮町に船場細川守を督任。横浜安の舟揚げであった函浦港の穀物を引受け、横浜上岸(1618)に完成した。当時は安らぎの場だらしく、船場町の繁華街ともして、古跡である。明治11年、日暮町役場が横浜税關の税課とともに、三島西中学校を「日暮町」、横浜税關は日暮町役場を改設。一日は閑散地200余名となり、駅前の堤防にも寄り合っている。門牌には、元様子を留めるに寄せて船場道場には、幕府山から移した明治維新の勤王の志士12名の墓石や西海の日本之音人がある。

西南の役記念碑 明治30年(1897)、内外の役で勤務する所の被職員771名の最も居うる方に建設されたもの。明治12年、黄海山上に竣工したが、昭和4年半ばに陸上校舎を建築した際に、西高の役場に移された。

船場本郷

昭和清正と子守忠義

の別称。昭和清正と子守忠義が、横浜の日暮町に船場細川守を督任。横浜安の舟揚げであった函浦港の穀物を引受け、横浜上岸(1618)に完成した。当時は安らぎの場だらしく、船場町の繁華街ともして、古跡である。明治11年、日暮町役場が横浜税關の税課とともに、三島西中学校を「日暮町」、横浜税關は日暮町役場を改設。一日は閑散地200余名となり、駅前の堤防にも寄り合っている。門牌には、元様子を留めるに寄せて船場道場には、幕府山から移した明治維新の勤王の志士12名の墓石や西海の日本之音人がある。

西高の役記念碑 昭和4年(1929)、内外の役で勤務する所の被職員771名の最も居うる方に建設されたもの。明治12年、黄海山上に竣工したが、昭和4年半ばに陸上校舎を建築した際に、西高の役場に移された。



耕地整理の足跡

石塚

墓

姫嶺宿の景

男山秋月

まことほほひのう乃男山
寢世やぢめの神

梅雨松林雨

木きゆきめいじく鳴てす
手代のたぎての色かへぬ松

冬宿晴嵐

大さか風雪の山ひふる夜所
あらす夜日を心おもはし

景福寺曉鐘

筆寫れうのひよみゆきのれ
見人さくわむかみの山

蘿町暮雪

高岡のじ乃ゆすのすき舟六
けいふんとくみくみく

鹿川歸帆

妹々香入浦邊を西すと舟六
登りてのちの高岡を鹿川

福中橋夕照

名古屋城中をくま木人六
ちよせに叶ひとくまくまく

水車落鷹

種ちくす事仕者をす訓て
かうぬ場一萬葉うよ

畫讚 紅茶園春雄

撰者 醉月亭鶯雪

校合 雲林舍蓮中

画工 萬承陵道人

筆者 茗古齋有名

姬府降城赤尾

經架匱管卷雄

五個連名方義道

俗河野吉兵衛

庄石名所づくし

庄府名所をめぐりて見れば

その名高砂相生の松

鐘はあかつき尾上の松に

石はおけどち葉は瀧縁たきぶね

曾根の天神日丘の山に

松に千年の世に名を残す

固い塙の石の宝殿は

よそに聞へて名も龍が鼻らう

國も豈な太平の世に

深くね入りし手杖の松

朝日かがやく二見の浦に

二見堀とて名物ござる

加古の渡りの舟こき出て

舊に間へし宿の浦や

印南大堤うらうら越えて

六家の地蔵の仏をたのみ

あふの松原神風つよく

恋の浜辺にたつ身のつらさ

からん坐なる雁門の浦や

鳴尾裏水の波伝いきて

桜は桜木花さきそめて

日をば明石の入丸の沖

界の中透く通の舟は

は弓か淡路の島かくろ行く

廿五番の清水寺は

千手觀音その御岳山

法の花山春秋ごとに

枝垂栄へて谷間は茂る

廿七番れうつ習亭の

松の緑にふく山おろし

五段成笠守らせ給う

神の御庭の広峰山を

折り増位のその山つづき

月も照りそう有明の松

海に鳳輿堂筋の城へ

轟を手向する破壁はくへきと立

男山から姫山見れば

空に輝く白鷺の城

西は九つお菊の屋敷

教をよむたびのう積なや

主に忠義の營えい高く

四十七人本條をならべ

年の明神小五月まつり

年に二度さく白絆はサア

作者の妻娘は淡路の人三木屋兵衛・河野氏
経常園と号し狂歌をよくつくった

久保之川

名
前

の道より軍事に治て

御子の身をもつて

かの神を

也

かの神を

也

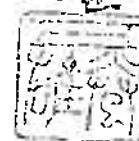


文政の葉篠行

大年

萬葉姫府連繁圖

大正十二年



成人家級

播磨の聖人「亀山雲平先生」を発掘する シリーズ 10回

幕末、幕府軍に参戦した姫路藩に対し追討の勅命がでた。

近隣の備前岡山藩1,500余兵は姫路船場まで進軍してきた。

姫路城無血開城に至る諸事情は言語に絶する。

この時、敵の本営は景福寺。

備前軍との交渉係は亀山雲平先生と斎藤鑑介。命を賭しての活躍を知る人は少ない。

明治元年1月16日、姫路城は開城した。

城明け渡しに際しての藩士の毅然とした態度は敬服の一語につきるが、その藩士を教え育んだ教育者亀山雲平先生に思いを馳せる人はさらに少ない。

テーマ：姫路城開城 と景福寺（現地講座）

亀山雲平顕彰会代表

講師：長野哲先生

日時：3月15日（木）PM 1:30～3:00

場所：白浜公民館1F会議室（集合）

と景福寺